

『手をつなぐということ』

明星学園 宮下 智

こんな話を聞いたことがある。

ある人が、昔は確かにしゃべっていたのに、あるときから喋らなくなって、それから二十数年後、また突然しゃべりだしたというのだ。「どうして、また喋るようになったの？」と問うと、「僕の大好きな担当の職員がこの三月で辞めてしまうと聞いたから、辞める前にきちんと話をしなくっちゃと思って…」と答えたという。さらに「じゃあどうして長い間、喋らなかったの？」と続けて問うと、驚いたことにその答えは「昔、お父さんが、お前はうるさい、黙ってろって言ったから」だと言うのだ。父親も父親なら息子も息子、うるさいから黙ってろと言われて、二十数年黙っているなんてことは、普通じゃできない。しかし、その黙っていようと決めた心を氷解させた、その担当の職員の人間力、支援力には頭が下がる。どんな人だったんだろう？と。

一方、こんな話もある。

実は聞こえているのに、三十年以上聞こえないふりをしていた方が、やっぱり聞こえるんだと解った時、「どうして聞こえないふりをずっとしていたの？」と問われて、「皆が早く、早くとばかり、いつも言うから」と答えたというのだ。

理由はどうあれ、三十年を越える月日を、聞こえないふりをするその意志の強さに驚愕すると同時に、耳が聞こえないふりをするという適応方法しか選択することができなかったその姿に支援者として悲しみに襲われるのだ。

今ここにあげた二つのエピソードから、皆さんが彼らの意志の強さだけ（頑固さなんていう人もいるかもしれない…）を感じたとすれば、それには大いなる間違いである。

「うるさい、黙ってろ」と言われて、「そんなに言うなら、黙っているわ！」にも、「早く、早く」から逃れるために聞こえないふりをする姿にも、あるのは意志の強さではなく、実は無力感なのである。

浴びせられた罵声に反撃する言葉もなく、打ち破る論理も無い（当たり前だよ、知的障害があるのだから、それができないのが、苦手なのが知的障害なのだから。ましてや喋ることができない方であればなおさらだ）、その姿が黙り込むという消極的な逃避方法に繋がっているわけだし、「早くしろ！」に、おそらく一生頑張っても応えられないだろう（テキパキできるんだったら、それは知的障害じゃないよね）申し訳なさか、聞こえないふりに繋がっているからだ。

しかし、三十年間以上にも渡る聾の世界から「僕は、ほんとは聞こえるんだけど…」と元の世界へ戻って来るその勇氣、それは誰から与えられたものなのか？

もう一度良く吟味してみよう。彼らの心を深く傷つけたのは確かに家族や支援者の言葉であった。でも、その無力感が支配する世界から自己肯定感の世界（伝えたい、聞きたい等の世界）への帰還を促したのは、他ならぬ家族や支援者の人間力だということを。傷つけるのも回りの人間なら、そこから救うことができるのも回りの人間なのである。

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

知的障害の方々であっても、本来、喋ることができる力があるはずなのに、喋れない（喋らない？）人たちがいる。

そんな人のことを考えながら、「喋るときってどんな時？」といつも自問する。会議中のこと、親子の会話、教室での授業、どこの場所にも、喋ることができる人と、喋ることができない人がいる。どんな時に喋れて、どんな時に喋れないのだろうか？と。

〈自分の意見が間違っていると思う時〉、〈誰かに批判、否定されるような気がする時〉、〈そんなことを考えているなんてと変な目で見られそうな時〉…、これが喋ることができない時、そして喋ることができるときは、もちろんその反対、〈自分の考えが誰にも非難されないし、否定されないと感じている時〉、そんな時に人間は喋ることができるのだ。自分がその場所で受け入れられ、みんなが仲間であると感じることができるときに、人は他の人の前で、自分の意見を表明することができるのだ。（これが自己決定の表明）

この心境は、話し言葉ある人も、ない人も同じ。

もう一度確認。「ダメ」「ちがう」といわれる環境、言われそうな雰囲気、そんな場所では人間は、喋る能力があっても喋らないのだ。

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

I男さん、半年前までの会話はこんな具合だ。

質問は「さかな、スキ？」すると答えは「スキ！」、そこで、続けて質問。「さかな、キライ？」「キライ！」
堂々巡りのオーム返し、ちっとも本音がわからない。

生活のあらゆる場面で、こんな調子。母親との電話でも、母「I男、元気？」I男「げんき！」母「ご飯食べたの？」I男「食べた！」一見、会話が成立していそうに感じる方もいらっしゃるのですが、これはただのオーム返し。母親にあわせているだけの会話である。

そのI男さん、半年後の現在の会話は、こんな具合である。

例えば、交流の中学生と。

中学生「今日は何をしましょうか？」I男「さんぽ、さんぽ、くつ、くつ、あっち」「ぼうし、していくよ」
食事が進まないI男さんを見ていて。

I男「T男さん、どうしたの？びょういん？」

母親との電話のやりとりでも。

I男「くる？くるま、くる？いっしょ？」

演劇の役決めで。

I男「えんちょうせんせいおこる？」職員「園長先生、怒らないよ」I男「おうじさま…」

次から次へと、機関銃のように主体的な発語が彼の口から発せられる。

この半年間の間に、いったい何が変わったのか？

会話だけじゃない、変わったのは。まずは、あれほどあった偏食が、ほとんど無くなった。

オムツの中にほとんどしていた排尿が、次第に回数が減り、「オシッコ、オシッコ」と教えるまでになり、どうも失敗しないようにと頑張っている姿が確認できる。

屋外はもちろん屋内でも、車椅子移動であるはずの彼が、車椅子を使わずに、自力で移動して玄関に座っていることがある。…という具合。

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

彼には、先天的な疾病がある。これが、彼に引け目を植え付け、引っ込み思案にさせ、自信を失わせた。

もちろん、全く彼のせいではない。指や耳、どこかへ軽くぶつけた程度でも、その部分が炎症を起こし、やがては脱落し、その個所が指であれば、次第に指先から、肉や骨が溶けるようにして、短くなっていつてしまうのである。

僕らが十年前に出会った時には、すでに指の長さは、両手五指全てが、残り一センチほど。冬には凍傷になって、骨が露出した。

もちろん、あまりカッコ良くない。その当時、まだ歩くことができた彼であるが、散歩などの時、同伴者が持つのは、手ではなく、腕だった。同伴者には手を傷つけてはいけないうという配慮もあって、腕を持つ人もあったのだろうが、本人からしてみれば、こんな手を握ってくれる人はいないという被害的な感情で、心が一杯になっていたであろうことが、推測できる。

彼は、この十年の間に、歩くことができなくなった。と同時に自主排泄の姿が無くなって、オムツ使用になった。そしてここ二年ほどは、加齢による衰えか、部屋で過ごすことが多くなった。偏食が増え、口の中で食べたものをゴモゴモ動かしていることが増え、飲み込みに時間がかかった。体重も減少した。外出内容の自己選択もだんだん自信無げな表情が多くなっていった。

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

僕らが、この時からやり始めたこと。それは彼の手を、出勤した職員全員が一回はじっくりと、心をこめて握りしめるという約束だった。彼を仲間はずれにしないという証拠を示す方法は、彼の一番の引け目を、一番大切にするという方法だった。

その実践が始まって、彼はメキメキしゃべり始めたのだ。それは伝えたい気持ちが、高まったからだ。自分の暮らしている場所が、今までよりもずっと居心地の良い場所になったからだ。手をつなぐ、たったこれだけのことが、彼と僕たちの関係を変えていく。……これからも…。

WELCOME TO SATORU WORLD

知的障害入所施設明星学園における心のケア

<http://homepage3.nifty.com/myojo-satoru/>